

学問のすゝめ 十七編

福沢諭吉著

人望論

十人の見る所、百人の指す所にて、何某は慥なる人なり、頼母しき人物なり、この始末を託しても必ず間違なからん、この仕事を任しても必ず成就することならんと、預めその人柄を当てにして、世上一般より望を掛らるゝ人を称して、人望を得る人物と云う。凡そ人間世界に人望の大小軽重はあれども、苟にも人に当てにせらるゝ人に非ざれば、何の用にも立たぬものなり。その小なるを云えば、十銭の錢を持たせて町使に遣る者も、十銭丈けの人望ありて、十銭丈けは人に当てにせらるゝ人物なり。十銭より一円、一円より千円、万円、ついには幾百万円の元金を集めたる銀行の支配人と為り、又は一府一省の長官と為りて、畜に金銭を預るのみならず、人民の便上便を預り、その貧富を預り、その榮辱をも預ることあるものなれば、斯る大任に当る者は、必ず平生より人望を得て、人に当てにせらるゝ人に非ざれば、逆も事を為すことは叶い難し。人を当てにせざるはその人を疑えばなり。人を疑えば際限もあらず。目付に目を付るが為に目付を置き、監察を監察するが為に監察を命じ、結局何の取締にも為らずして、徒に人の氣配を搦じたるの奇談は、古今にその例甚だ多し。又三井、大丸の品は正札にて大丈夫なりとて、品柄をも改めずして之を買い、馬琴の作なれば必ず面白しとて、表題計りを聞て注文する者多し。故に三井、大丸の店は益繁昌し、馬琴の著書は益流行して、商売にも著述にも甚だ都合よきことあり。人望を得るの大切なること以て知るべし。

十六貫目の力量ある者へ十六貫目の物を負わせ、千円の身代ある者へ千円の金を貸すべしと云うときは、人望も榮吊も無用に属し、唯実物を当てにして事を為すべき様なれども、世の中の人事は斯く簡易にして淡泊なるものに非ず、十貫目の力量なき者も、坐して数百万貫の物を動かすべし、千円の身代なき者も、数十万の金を運用すべし。試に今富豪の聞えある商人の帳場に飛込み、一時に諸帳面の精算を為さば、出入差引して幾百幾千円の上足する者あらん。この上足は即ち身代の零点より以下の上足なるゆえ、無一銭の乞食に劣ること幾百幾千なれども、世人の之を視ること乞食の如くせざるは何ぞや。他なし、この商人に人望あればなり。されば人望は固より力量に由て得べきものに非ず、又身代の富豪なるのみに由て得べきものにも非ず、唯その人の活潑なる才知の働と正直なる本心の徳義とを以て、次第に積で得べきものなり。

人望は智徳に属すること当然の道理にして、必ず然るべき筈なれども、天下古今の事実
に於て、或はその反対を見ること少なからず。藪医者が玄関を廣大にして盛に流行し、売
薬師が看版を金にして大に売弘め、山師の帳場に空虚なる金箱を据え、学者の書齋に読め
ぬ原書を飾り、人力車中に新聞紙を読んで、宅に帰て午睡を催す者あり、日曜日の午後
に礼拝堂に泣て、月曜日の朝に夫婦喧嘩する者あり、滔々たる天下、真偽雑駁、善悪混同、孰
れを是とし孰れを非とすべきや、甚しきに至ては人望の属するを見て本人の上智上徳をト
すべき者なきに非ず。是に於てか稊や見識高き士君子は世間に榮譽を求めず、或は之を浮
世の虚吊なりとして、殊更に避る者あるも亦無理ならぬことなり。士君子の心掛に於て称
すべき一箇条と云うべし。

然りと雖も、凡そ世の事物に就き、その極度の一方のみを論ずれば弊害あらざるものな
し。彼の士君子が世間の榮譽を求めざるは大に称すべきに似たれども、そのこれを求ると
求めざるを決するの前に、先ず榮譽の性質を詳にせざるべからず。その榮譽なるもの果
して虚吊の極度にして、医者、玄関、売薬の看版の如くならば、固より之を遠ざけ之を避
くべきは論を俟たずと雖も、又一方より見れば社会の人事は悉皆虚を以て成るものに非ず。
人の智徳は猶花樹の如く、その榮譽人望は猶花の如し。花樹を培養して花を開くに、何ぞ
殊更に之を避くことを為んや。榮譽の性質を詳にせずして、概して之を投棄せんとする
は、花を払て樹木の所在を隠すが如し。之を隠してその効用を増すに非ず、恰も活物を死
用するに異ならず、世間の為を謀て上便利の大なるものと云うべし。

然らば即ち榮譽人望は之を望むべきものか。云く、然り、勉めて之を求めざるべからず、
唯これを求むるに当て分に適すること緊要なるのみ。心身の働を以て世間の人望を収るは、
米を斗て人に渡すが如し。升取りの巧なる者は一斗の米を一斗三合に斗り出し、その拙な
る者は九升七合に斗り込むことあり。余輩の所謂分に適するとは、斗り出しもなく又斗り
込みもなく、正に一斗の米を一斗に斗ることなり。升取りには巧拙あるも、之に由て生ず
る所の差は僅に内外二、三分なれども、才徳の働を升取りするに至ては、その差決して三
分に止るべからず、巧なるは正味の二倍、三倍にも斗り出し、拙なるは半分にも斗り込む
者あらん。この斗り出しの法外なる者は、世間に法外なる妨を為して、固より悪むべきな
れども、姑く之を擱き、今爰には正味の働を斗り込む人の為に、少しく論ずる所あらんと
す。

孔子の云く、君子は人の己を知らざるを憂いず、人を知らざるを憂うと。この教は当時
世間に流行する弊害を矯めんとして述たる言ならんと雖ども、後生、無氣無力の腐儒はこ
の言葉を真ともに受けて、引込み思案にのみ心を凝らし、その悪弊漸く増長して、遂には
奇物変人、無言無情、笑うことも知らず、泣くことも知らざる木の切れの如き男を崇めて、
奥ゆかしき先生なぞと称するに至りしは、人間世界の奇談なり。今この陋しき習俗を脱

して活潑なる境界に入り、多くの事物に接し博く世人に交り、人をも知り己をも知られ、一身に持前正味の働を逞うして自分の為に、兼て世の為にせんとするには、

第一 言語を学ばざるべからず。文字に記して意を通ずるは固より有力なるものにして、文通又は著述等の心掛も等閑にすべからざるは無論なれども、近く人に接して直に我思う所を人に知らしむるには、言葉の外に有力なる者なし。故に言葉は成るだけ流暢にして、活潑ならざるべからず。近来世上に演説会の設あり、この演説にて有益なる事柄を聞くは、固より利益なれども、この外に言葉の流暢活潑を得るの利益は、演説者も聴聞者も共にする所なり。又今日上弁なる人の言を聞くに、その言葉の数、甚だ少なくして、如何にも上自由なるが如し、譬えば学校の教師が訳書の講義などをするとき、円き水晶の玉とあれば、分り切たる事と思うゆえか、少しも弁解を為さず、唯むずかしき顔をして子供を睨み付け、円き水晶の玉と云う計りなれども、若しこの教師が言葉に富て云い舞しのよき人物にして、円きとは角の取れし団子の様など云うこと、水晶とは山から掘出す硝子の様な物で、甲州なぞから幾らも出ます、この水晶で拵えたごろゝ@する団子の様な玉と解き聞かせたらば、婦人にも子供にも腹の底からよく分るべき筈なるに、用いて上自由なき言葉を用いずして上自由するは、必竟演説を学ばざるの罪なり。或る書生が日本の言語は上便利にして文章も演説も出来ぬゆえ、英語を使い英文を用るなぞと、取るにも足らぬ馬鹿を云う者あり。按ずるに、この書生は日本に生れて、未だ十分に日本語を用いたることなき男ならん。国の言葉は、その国に事物の繁多なる割合に従て次第に増加し、毫も上自由なき筈の者なり。何はさておき、今の日本人は今の日本語を巧に用いて弁舌の上達せんことを勉むべきなり。

第二 顔色容貌を快くして、一見、直に人に厭わるゝこと無きを要す。肩を聳かして諂い笑い、巧言令色、太鼓持の媚を献ずるが如くするは、固より厭うべしと雖ども、苦虫を嚙潰して熊の胆を啜りたるが如く、黙して誉められて、笑て搦をしたるが如く、終歳胸痛を患るが如く、生涯父母の喪に居るが如くなるも亦甚だ厭うべし。顔色容貌の活潑愉快なるは、人の徳義の一箇条にして、人間交際に於て最も大切なるものなり。人の顔色は、猶家の門戸の如し、広く人に交て客来を自由にせんには、先ず門戸を開て入口を洒掃し、兎に角に寄附きを好くすることこそ緊要なれ。然るに今、人に交らんとして顔色を和するに意を用いざるのみならず、却て偽君子を学で殊更に渋き風を示すは、戸の入口に骸骨をぶら下げて、門の前に棺桶を安置するが如し。誰か之に近づく者あらんや。世界中に仏蘭西を文明の源と云い、智識分布の中心と称するも、その由縁を尋れば、国民の挙動、常に活潑気軽にして、言語容貌共に親しむべく近くべきの気風あるを以て源因の一箇条と為せり。人或は云わん、言語容貌は人々の天性に存する者なれば、勉て之を如何ともすべからず、之を論ずるも詰る所は無益に属するのみと。この言、或は是なるが如くなれども、人智發育の理を考えなば、その当らざるを知るべし。凡そ人心の働、これを進めて進まざ

るものあることなし。その趣は人身の手足を役して、その筋を強くするに異ならず。されば言語容貌も人の心身の働なれば、之を放却して上達するの理あるべからず。然るに古来日本国中の習慣に於て、この大切な心身の働を捨てゝ顧る者なきは大なる心得違いに非ずや。故に余輩の望む所は、改て今日より言語容貌の学問と云うには非ざれども、この働を人の徳義の一箇条として等閑にすることなく、常に心に留めて忘れざらんことを欲するのみ。

或人又云く、容貌を快くするとは表を飾ることなり。表を飾るを以て人間交際の要と為す時は、啻に容貌顔色のみならず、衣腕も飾り、飲食も飾り、氣に叶わぬ客をも招待して、身分上相応の馳走するなぞ、全く虚飾を以て人に交るの弊あらんと。この言も亦一理あるが如くなれども、虚飾は交際の弊にしてその本色に非ず。事物の弊害は動もすればその本色に反対するもの多し。過ぎたるは猶及ばざるが如しとは、即ち弊害と本色と相反対するを評したる語なり。譬えば食物の要は身体を養うに在りと雖ども、之を過食すれば却てその栄養を害するが如し。栄養は食物の本色なり、過食はその弊害なり。弊害と本色と相反対するものと云うべし。されば人間交際の要も和して真率なるに在るのみ、その虚飾に流るゝものは決して交際の本色に非ず。凡そ世の中に夫婦親子より親しき者あらず、之を天下の至親と称す。而してこの至親の間を支配するは何物なるや、唯和して真率なる丹心あるのみ。表面の虚飾を却け又之を掃い、之を却掃し尽して始めて至親の存するものを見るべし。然ば則ち交際の親睦は真率の中に存して、虚飾と並び立つべからざるものなり。余輩固より今の人民に向て、その交際、親子夫婦の如くならんことを望むに非ざれども、唯その赴くべきの方向を示すのみ。今日俗間の言に人を評して、あの人は気軽な人と云い、氣のおけぬ人と云い、遠慮なき人と云い、さっぱりした人と云い、男らしき人と云い、或は多言なれども程のよき人と云い、騒々しけれども悪くからぬ人と云い、無言なれども親切らしき人と云い、可恐ようなれども浅さりした人と云うが如きは、恰も家族交際の有様を表し出して、和して真率なるを称したるものなり。

第三 道同じからざれば相与に謀らずと。世人又この教を誤解して、学者は学者、医者
は医者、少しくその業を異にすれば相近くことなし、同塾同窓の懇意にても塾を巢立ちたる後に、一人が町人となり一人が役人となれば、千里隔絶、呉越の觀を為すものなきに非ず。甚しき無分別なり。人に交らんとするには啻に旧友を忘れざるのみならず、兼て又新友を求めざるべからず。人類相接せざれば互にその意を尽すこと能わず、意を尽すこと能わざればその人物を知るに由なし。試に思え、世間の士君子、一旦の偶然に人に遭うて生涯の親友たる者あるに非ずや。十人に遭うて一人の偶然に当らば、二十人に接して二人の偶然を得べし。人を知り人に知らるゝの始源は多くこの辺に在て存するものなり。人望榮吊なぞの話は姑く擱き、今日世間に知己朋友の多きは差向きの便利に非ずや。先年宮の渡しに同船したる人を、今日銀座の往来に見掛けて双方図らず便利を得ることあり。今年出

入の八百屋が、来年奥州街道の旅籠屋にて、腹痛の介抱して呉れることもあらん。人類多しと雖ども鬼にも非ず蛇にも非ず、殊更に我を害せんとする悪敵はなきものなり。恐れ憚る所なく、心事を丸出して颯々と応接すべし。故に交を広くするの要は、この心事を成る丈け沢山にして、多芸多能、一色に偏せず、様々の方向に由て人に接するに在り。或は学問を以て接し、或は商売に由て交り、或は書画の友あり、或は碁、将棋の相手あり、凡そ遊冶放蕩の悪事に非ざるより以上の事なれば、友を会するの方便たらざるものなし。或は極て芸能なき者ならば、共に会食するもよし、茶を飲むもよし、尚下て筋骨の丈夫なる者は、腕押し、腕引き、足角力も一席の興として、交際の一助たるべし。腕押しと学問とは道同じからずして、相互に謀るべからざるようなれども、世界の土地は広く、人間の交際は繁多にして、三、五尾の鮒が井中に日月を消すとは少しく趣を異にするものなり。人にして人を毛嫌いする勿れ。

(明治九年十一月出版)

学問のすゝめ 十七編 終